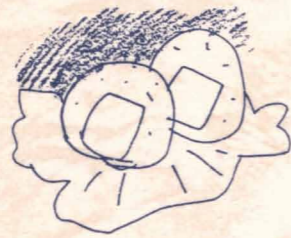


阪神淡路大震災後

みんなに支えられて成長する

おはなし

神戸のなおちゃん



作 池見宏子
イラスト 池見民子

神戸のなおちゃん

なおちゃんは、もうすぐ3年生です。
今年のめあては、
「やさしいおねえさんになること」

ちょっとおせっかいで、気のつくなおちゃんは、
お友だちのさっちゃんのことが気になり、
ついお母さんみたいに「はよ、しいよ」と言っっては、
さっちゃんをおこらせてしまいます。



おとうとが入学してくる今年こそ、
やさしいおねえさんにならなければ・・・
3学期になって、よけいそう思うなおちゃんでした。
でも、そんなこともわすれるぐらい、
この3連休は、よく遊びました。

いよいよ3連休もおわり、お正月気分もさようなら
休みあけは、おきづらくて家中ぐっすりねていたのです。



とつぜん

ドッドッドッドー

とおくからつきあげるような音がせまってきて
目がさめてしまったなおちゃん
きゆうに体が大きくゆれて、
「なんだろう？」と、思うまもなく
ジェットコースターにむりやりのせられたみたいに、
はげしく動かされました。
思わずベッドにしがみつくと、
大きな何かが暗やみをとんでいるのです。
こわくなってふとんをかぶったなおちゃんの上にも
重いものが落ちてきました



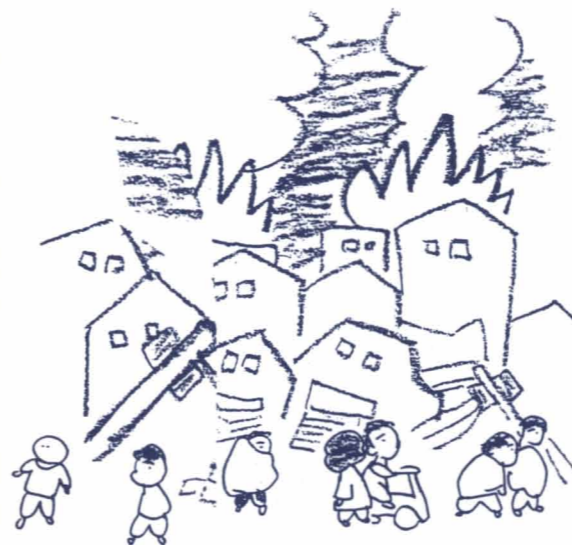
「なおちゃん」
「まさしいー
だいじょうぶかあ」
.....
「すぐいくから、うごくな」

今まで聞いたこともないお父さんとお母さんのはりつめた声に、
なおちゃんたちは、大変なことがおこったんだと思いました。

なおちゃんたちのふとんの上には、
タンスのひきだし、つくえの上の本だな、
とけいにえんぴつけずり、われたガラス・・・
なぜか、ベランダのうえ木ばちまでとんできました。
でもふとんがなおちゃんたちをまもってくれたのです。

ゆれがおさまると、
まだ暗くてようすのわからない家の中を、
お父さんはガラスをふまないようにくつを、
お母さんは、体を守るために上着をもってきてくれました。

手さぐりで外に出ると、
きんじょの人も出てきました。
とおくの方で火の手があがっています。
だんだん明るくなってきました。
いつも見ている近所のようすとまるで変わっていました。
ゆめを見ているようでした。



お父さんが家から持って出たラジオで
「震度6以上の地震が神戸に起こった」
「多くの人がなくなっている。」
と聞きました。

近所の人たちは、
次の余震が、いつくるかわからないので、
ひなんしょになっている学校に向かいました。
なおちゃんたち家族も、
その流れにのるように
学校のある方に歩いていきました。

とちゅうかたむいている家、
でんせんがたれ下がっているところをさけながら歩きました。
なおちゃんのすきなおかしやさんの1Fがなくなって、
地めんにかんぼんが立っていました。
道にふとんをひいてねているおばあちゃんがいました。
道のわれたところから水がふきだしていました。

学校に近づいてきた時

「人がうまっているから、助けて下さい」と何度もうったえるようにさけぶ声をきいたお父さんは、お母さんに「学校で待っているように」言いのこして走って行きました。



たくさんの方が運動場に集まっていました。遠くでサイレンの音がひびきます。



何時間たったことでしょうか。お父さんがやっと帰ってきました。お父さんは

「くずれた家の中から、コンコン音がしていたこと。集まった男の人7~8人でその場所のやねをはがし、はしらをのけると、土のかべの下から動いている手が見えたこと。やっとおじいさんを助け出したとき、遠まきに見ていた人たちからはくしゅがおこったこと・・・」を、話してくれました。

おなかがすいてきたまさし君が、ぐずりはじめました。しばらく家にもどれないかもしれないからと、お父さんとお母さんは、なおちゃんたちを、となりのたき火をしている人たちにあずけて、家にもどりました。食べる物と、寒さをふせぐ物をもってくるためです。

お母さんは、食器だなや、れいぞうこもたおれて、足のふみ場もないほどめちゃくちゃになった台所から、かんづめ、レトルト食品、おかし・・・キャンプの時の食器・・・ぶつだんからろうそくとマッチ、そしてさいふなど思い出すまま、手あたりしだいふくろにつめました。最後にすいはんきから、昨日の残りのごはんをラップにくるんで、おにぎりを作ると、いそいで家をとびだしました。



お父さんは、自転車にキャンプのテントとふとんを1組のせて、外で待っていました。

ひなんしょの学校へもどるとちゅう、お母さんは、ひがいの少なかったお店を見つけてたりないものを買うことにしました。お店は見つかりましたが、たくさんの方がならんでいました。飲み物とパンがほしかったのですが、お母さんの番がきた時には、おかししか残っていませんでした。でもなおちゃんたちがおなかがすいたときのために買いました。

お父さんは、こうしゅう電話の所に行きました。会社へのれんらくと、岡山のおじいちゃんにぶじを知らせるためです。長い列ができていましたが、じゅん番がくるまで待ちました。



やっとお母さんたちが、たくさん荷物を持って帰ってきました。お母さん手作りのおにぎりは、アルミホイルにつつんで、たき火でやいてホカホカにしてくれました。お父さんは、運動場の一すみになおちゃんたちがねるためのテントをはって、その中にふとんをひいてくれました。なおちゃんは、朝のこわかったことをいっしゅんわすれて、キャンプにきた気分になりました。まさしくんとすもうをとってあばれてみました。

たんけんに行くつもりで、まさしくんをつれて学校のトイレに行ってみました。どのトイレも水が出ないのでつまって、はながまがりそうなくらいくさかったです。こまっていると、おばさんがバケツに水をくんできて流してくれました。

だんだん暗くなってくると、朝のことが思い出されてこわくなってきたなおちゃんでしたが、ばんごはんのやき肉を食べると、つかれたのかテントの中に入ってすぐねむってしまいました。



なおちゃんは、寒くてゾクゾクするので目がさめました。
いつのまにか朝がきました。

たき火のまわりになべやかまがおかれ、
やかんにゆがわいています。
近所のおじさん、おばさん、友だちもいっしょに、
パンをやいてにぎやかに朝ごはんです。

なおちゃんのお父さんは朝ごはんをすますと、
自てんしゃで大きかの会社に出かけました。
電車もバスもおっていないので、国道を自てんしゃでいくのです。
歩いている人もいっぱいです。
帰りはカセットボンベや電池、
お母さんにたのまれた食べ物等買い物をするので
夜おそくなる予定です。

まだ、ときどきよしんがきます。

ひるま、大人たちが仕事に行ったり、
家のあとかたづけをしたり、みんなで助けあっている間、
なおちゃんたち小さい子どもたちは、大きいお兄ちゃんたちに、
ゲームやおにごっこをしてテントのまわりで遊んでもらいました。



電気が3日目につきました。

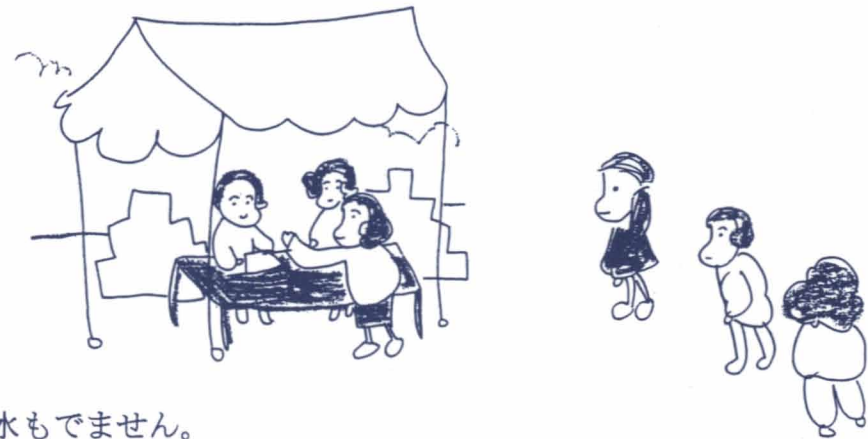
4日目、よしんが少しずつおさまってきたので、
なおちゃんたちは、家に帰ることにしました。
かべはくずれて中はぐちゃぐちゃだけど、
家はまだたっています。

家の中のおくのへやは、
あまりものを置いてなかったの少しかたづけると、
家族4人がねられました。
食事もその部屋で・・・
何もかもしばらくそのへやですることになりました。
なおちゃんは、
みんなといっしょにいられるのでホッとしました。

家に帰ってからのなおちゃんたちは、
きゅうにいそがしくなりました。
ひなんしょの学校に、
食べ物やきゅうえんぶっしをお母さんにたのまれて、
近所のお兄さんといっしょに取りに行くからです。
学校では先生たちが、いるものをわたしてくれました。
大人にまじって少し大きいお兄さんたちもはたらいていました。
「ボランティア」というのです。

なおちゃんもしたくなったので、お母さんにいうと、
「なおちゃんも家でしっかりボランティアしているのよ。
ガスもまだ出ないし、お店もたくさんつぶれたので、
みんなとっても助かるわ」

と言いながら、後かたづけでいそがしい手を休めて、
頭をなでてくれました。
なおちゃんはうれしくなっていました。



まだ水もでません。
あらいもの水やトイレに流す水は、
近くの川の水をくんできてつかいます。
朝早く、家族みんなでそれぞれ入れ物を持って水くみにいきます。
まさし君はペットボトルに、なおちゃんはバケツに水を入れます。
水をくんで帰るとき、坂道なので、
何度もバケツを道において、
持ちかえてはゆっくりゆっくりはこびました。
そうして、お風呂に少しずつくんできた水がふえていくと
うれしくなります。
お母さんは、できるだけあらいものをへらすため、
食器にラップをひいて何度もつかうくふうをしました。
飲み水は、学校のひなんしょに給水車がくるので、
お父さんが大きいタンクにいっぱいもらってきたのを大事に使います。

1週間もたったでしょうか。
とつぜん電話がなりました。
岡山のおじいちゃんからでした。
何度もかけたけれどかからなくて、
今やっとかかったそうです。

「なおちゃんたちを、岡山につれてこないか？」
という話です。

そういえば、近所のお友だちが、
つぎつぎいなくなっていました。
親せきや、知っている人をたよって、
まだよしんがきてきけんな町、
水やガスが出ない不自由な神戸の町をはなれていくのです。
でも、なおちゃんは、神戸にいることにしました。
ちょっときけんで不自由な町だけど、
家族一緒に過ごせる家があります。



なおちゃんは、ふとクラスの友だちのことが気になりました。
毎日水くみや食えること、後かたづけにいっしょうけんめいでした。
おとうとのまさし君のめんどうも見なければなりません。
でも思い出したらきゅうにさっちゃんに会いたくなりました。



そんな時、
「こんにちは。なおちゃん、がんばっているね」
担任の山田先生が来られました。
「2月1日のお昼、学校の運動場に集まるのよ」
お知らせのお手紙をお母さんに見せながら
話してくれました。

先生のニコニコ顔を見るとなおちゃんは、
地震前の学校のことを思い出しました。
そしてさっちゃんたちに会いたくてたまらなくなりました。
お友だちにあえる・・・
あたまの中はそのことでいっぱいになりました。

2月1日なおちゃんは
ひさしぶりにみんなに会いに行きました。
でもみんなといっても、なおちゃんのクラスは、
33人いたのに8人しか集まりませんでした。
なかよしのさっちゃんも来ていません。
でも、集まった友達は
みんなで肩をたたきあったり
大声でおしゃべりしました。

運動場には、まだひなんしている人たちのテントがあるので、
あいたところに集まりました。

校長先生から悲しいお話を聞きました。
なおちゃんの学校のお友だちがこの地震でなくなったのです。
担任の山田先生から
なおちゃんのクラスの友だち
ゆうちゃんのお父さんがなくなったことも聞きました。

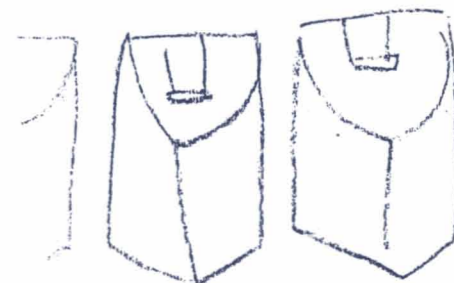


なおちゃんは、
音をたててまわりの物がくずれてきた
あのしゅんかんを思い出して
体がかたくなってしまいました。

それからなおちゃんは
しばらく夜になると、
わすれていたあのしゅん間を思い出して、
なく日がつづきました。

おとうとが見ていても
なみだがつぎつぎ出てくるのです。
お母さんにだっこしてもらってねました。

おとうとのまさし君は、
そんなおねえちゃんをだまって見ていました。
まさし君は、
おねえちゃんが地震がおこってからずっと
がんばってきたことをよく知っていたからです。



なおちゃんたちの学校はつぶれてつかえなくなったので、となりの町の学校の教室をかりてのべんきょうが始まりました。朝は、その学校の友だちがべんきょうをするので、なおちゃんたちはお昼からのべんきょうです。



お昼に運動場に集まって、おうふう1時間かけて通いました。行き帰りの道は、くずれた家のよこを通りました。いつまでも水びたしのままになったどうろを歩きました。ワイワイおしゃべりしながら歩きました。ときどきふざけておいかけてっこしかけると、先生がちゅういしました。



せまくなった歩道のすぐ横をダンプカーやショベルカーが地ひびきをたてて通り過ぎます。

ジャンパーを着て、ぼうしをかぶってマスクをして歩き始めても、学校に着いたらホカホカしました。でも雨の日、雪の日、風の強い日はたいへんでした。寒くていつまでも手足がこおっていました。

学校につくと、しずかに教室に入ります。となりの教室のまどには、ひなんしている人たちのせんたくものが見えます。休み時間も外に自由に遊びに行けません。運動場がちゅうしゃ場になっているので、あぶないのです。だからなおちゃんは、体育の時間が一番まちどおしいのです。

それから音楽も心が明るくなります。
・・・東京の学校の友だちから、送ってもらったはげましのテープ「はじめの一步」がとても気に入りました。しらずしらずのうちに「今日からなにもかもが新しい
・・・生まれかわって大きく一步あるき出せ・・・」とくちずさんでいるなおちゃんでした。

もともとお話がすきななおちゃんですが、もっとすきになりました。あつというまにいろんな世界に行けるからです。

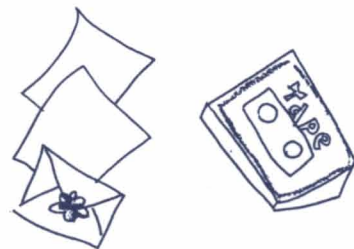


プレハブ教室が、運動場にたてられることになったので、遠くに行った友だちも少しずつ帰ってきました。

友だちが帰ってくるたびに、みんなは「おかえりなさい」と大きな声でむかえます。

さっちゃんも帰ってきました。帰ってきた友だちは、はずかしそうにしながらもうれしそうです。なおちゃんは、さっちゃんが少しおねえさんになったみたいに思いました。

日本全国、世界からはげましのおたよりがとどきます。なおちゃんは、うれしくなって先生からももらったお手紙を家に持って帰っておへんじを書きました。



北海道の奥尻島からとどいた文集は、家族みんなで読みました。ひどい地震があったところだけががんばっている様子が心に伝わってきて何度も読みました。

そんな日のつみかさねでなおちゃんは、少しずつ少しずつ、夜になっても泣く回数がへってきました。

そしていつのまにか一人でねられるようになっていました。

いろんなことのあった3学期・・・あすは、いよいよ終業式です。



終業式の日、
山田先生は集まったみんなに
「2学期にならったアフリカのルワンダの友だちのことおぼえてる？」
と聞きました。

そういえば、2学期のころなおちゃんたちのクラスは、
きゅうしょくのごはんも、おかずもよくのこしました。
ルワンダの友だちは食べる物も少なく
大変不自由な生活をしていただけけれど、
がんばっていました。
あの時は、「かわいそう」と思っただけでした。



なおちゃんは、水くみをしたり、
なんどもひなんしょに食べ物を取りに行った事を思い出しました。

おにぎり1こがどんなにおいしかったことでしょう。



なおちゃんは、はっきり思い出しました。
水がはじめて出た日のことを。
あれは、学校が始まって1週間たった日です。
つかうのがもったいなくて、
少しずつ、少しずつためてつかったこと。
たっぷりのおふろに、何回も何回も入ったこと。

ガスが出たときの
お母さんのうれしそうな顔もわすれません。
ガスやさんが来て、
けんさが終わるまでへやのすみの方でびくびく見ていたお母さん。
「よろしいですよ」とガスコンロに青い火がついた時、
思わず拍手をしたお母さん。



電気も、水も、ガスも食べ物も、
日本中いろんな所からおうえんしてもらって、
やっと元の生活に近づいてきたのです。

同じ地球に住む ルワンダの友だちの気持ちが
少し分かったような気がしました。



山田先生は、
終業式に帰って来たくても帰って来られなかった
友だちの話をしてくれました。
33人のうち、12人は帰って来ませんでした。

お父さんがなくなって
転校してしまったゆう君・・・
マンションの4Fがおしつぶされて
帰るところがなくなったこうじ君・・・
つぎつぎにお友だちの顔がうかんでは消えます。



なおちゃんは、
いままで一人でもお休みが続いた後、
みんなそろった時には、
山田先生がニコニコして
黒板にハナマルを書いてくれたのを思い出しました。
もうあのハナマルはもらえないまま2年生が終わります。

3年生になったなおちゃんは、
きょうも1年生になったまさし君の手をひいて
プレハブ教室につれて行きます。

ちょっとやさしくなったかな？
と自分で思いながら……



なおちゃんは、新しいクラスで新しい先生やお友だちと
少しむずかしいけれどわくわくする勉強をいっぱい習いました。

全国にそかいしていたお友だちも大分帰ってきました。
仮設校舎がたってせまくなった運動場ですが、
みんなと遊ぶ時間が待ち遠しくなりました。

中学校と一緒の仮設校舎なのでチャイムが鳴りません。
でもだれかが時計を見て
勉強時間や遊ぶ時間を知らせてくれるので、
こまらないのです。

二学期のとちゅう、
とつぜんこうじ君が帰ってきました。
こうじ君は、姫路の親戚から神戸西区の仮設に移り、
そして須磨区にやっと借りる家が見つかったそうです。
どうしても帰って来たくて、須磨から電車で通うことになりました。
なおちゃんのとりのクラスのクラスに帰ってきました。
前のクラスの友だちが、肩をたたきに来ました。
なおちゃんは、こうじくんが今までずっとそこにいたように思いました。

社会科で「神戸市の移り変わり」を習いました。
近所のおじいさんおばあさんに、
子どものころのお話を聞きに、
近くの公民館に行きました。
今のように交通も便利でなく、馬車や人力車が多いころ、
このあたりはたんぼや畑ばかりで、ほとんどが農家だったこと、
きれいな水がみぞを流れ、水車が動いていた話を聞いて、
タイムスリップした気分になりました。

神戸の町は港を中心にして発展してきました。
今の町になるまでに川をつけかえて町にしたり、
山をけずってその土を海にうめたてて人工島を造ったり
いろいろ工夫をしたので、
人口が150万人以上の
大きな町になったことを知りました。

でもその発展までに、
大水害や大空襲などで
たくさんの人々がなくなる不幸もあったのです。

神戸の町の移り変わりを勉強して、
今度の阪神淡路大震災の被害を思うと、
神戸の町はこれで良かったのかなと考えてしまいます。

自然に怒られた気がしました。

なおちゃん達はこれからの神戸の町をこのように考えました。



わたしは、じしんがおこっても
いいように、家の根元をゴムみた
いなので止めればいいんじゃない
のかと思います。
ゴムがうごいたら家はたおれない
から。
せつびもとのつってほしいけれど
空気や自然も大事にしたい。
空気がよごれないようにするには
木がたくさんあればいいんだ。

きれいな町にしたい。
じしんになって水道が止まったり
したときのために、水をためてお
くばしよをつくっておくとやくだ
つと思う。
どの道にも車と人のあるくばしよ
をつけたらいいと思う。
とてもじょうぶな広いひなんする
ばしよをつくりたい。
暗いところをへらしたいのででん
とうをつける。
ひなん道具のあるばしよもつくり
たい。



川にきれいな水が流れていて、
鳥がいて、山を切り開かないよう
にする。
それでお年よりは、ひとりぼっち
にしないようにする。
そして自由に外に出れるようにも
つとべんにする。
たとえばバスのていりゆうじよを
そんなに歩かなくても行けるよう
にする。
お年よりのためのしせつもたくさ
んつくる。びょういんでせわが
よくできる。

お金があっても食べ物がかつ
たらだめだから、たんぼや畑をふ
やしたいなあと思いました。
お金がちよつとくらいななくても田
んぼや畑だけで、いざつとときも
しよくりようがあるからいいと思
います。
住むところもびょういんもいっば
い作りたいたいと思います。



なおちゃんたちは、
震災から1年たってできた「震災資料室」に行ってみました。
震災直後、救^{きゆうえん}援でもらったログハウスが資料室になったのです。
中にはいると忘れていたあの時のことが思い出されましたが、
なおちゃんはもうなきません。

「大震災の被害の様子」「どうして神戸に地震が起こったか」
よく分かるようにパネルがかざってありました。
震災でなくなったお友だちの写^{おうえん}真がなおちゃん達を見つめていました。
その下に
「お友だちの分もいのちを大切に生きていきます。」
という作文^{はひ}がありました。
全国の励^{おうえん}ましのお手紙、ボランティアの応援の写^{おうえん}真もありました。
お友だちがだんだん帰ってきた様子がグラフにまとめてありました。
なおちゃんたちが書いた絵や作文もありました。



なおちゃんは、
社会で昔の人々の苦勞を、
いろんな資料で知ったことを
思い出しました。
ここに展示^{てんじ}されている資料も、
何年も何十年もたって、
震災を知らない子ども達に
震災のことを知らせることにな
るだろうなと思うと、
なおちゃん達が震災の時書いた絵や作文も
とても大切な物と思うのです。

町がどんどん生まれ変わって、
震災のことが消えていくので、
なおちゃんもつい忘れかけていました。
でもぜったい忘れてはいけないことがこの資料室に集まっていた。
大切なことを忘れかけたらこの資料室に来ようと思^{やくそく}いました。
なくなったお友だちの写^{おうえん}真にその気持ちを約束して、
なおちゃんは、資料室を出ました。

なおちゃんはもうすぐ4年生になります。
 校舎はとりこわされて、
 まわりの木だけが残りました。
 なおちゃんの楽しみは、
 5年生になったら新しい校舎ができることです。
 そして、それまでに学校のまわりのさらちもなくなり、
 家がいっぱい建って、
 まだ帰ってこられない友達が帰ってくることです。



クラブ活動にも参加できる4年生……
 もうすぐ高学年の仲間入りをするので。
 なんだかうれしくてたまらなくなったなおちゃんは、
 でこぼこの運動場をスキップしながら走っていきました。

はじめの一步



1

ちいさなとりが うたっているよ
 ぼくらに朝が おとずれたよと
 きのうとちがう あさひがのぼる
 川のながれも かがやいている
 はじめのいつぽ あしたにいつぽ
 今日からなにもかもが新しい
 はじめのいつぽ あしたにいつぽ
 ゆうきをもって

大きく いつぽあるきだせ

2

信じることを わすれちゃいけない
 かならず朝は おとずれるから
 ぼくらのゆめを なくしちゃいけない
 きつといつかは かなうはずだよ
 はじめのいつぽ あしたにいつぽ
 今日からなにもかもが新しい
 はじめのいつぽ あしたにいつぽ
 うまれかわって

大きく いつぽあるきだせ

阪神淡路大震災における被災地域の、児童生徒などの受け入れ状況

1996/1/12 (現在)

(公立学校への転入学者数) (人)

受け入れ地方	幼稚園	小学校	中学校	高等学校	障害児学級	計
北海道	0	2	0	5	0	7
東北	2	43	22	4	1	72
関東	16	280	107	74	1	478
中部	13	153	78	38	0	282
近畿	464	6683	1674	202	38	9061
中国	23	183	81	31	0	318
四国	14	113	57	38	2	224
九州	7	241	101	57	1	407
合計	539	7698	2120	449	43	10849
合計 10849人						

大震災により、神戸市内公立学校へ、

区域外・校区外通学などを行っている児童生徒数

(1996/1/8現在)

小学校				中学校			
低学年	中学年	高学年	障害学級	1年	2年	3年	障害学級
315	483	860	15	414	521	724	4
計 1672				計 1663			
合計 3335人							

(兵庫県教育委員会総務広報より)

あとがき

阪神淡路大震災後、神戸の子ども達にも2度目の春がやってきました。

1年目の春は、本当に待ち焦がれた春でした。

未曾有の震災の中で、多くのかげがえのない命や、生活の基盤を根こそぎ奪われた惨状を目の当たりにした子ども達に、自然に巡ってくる春のめぐみの中で、どれだけ夢を語り、町の復興の希望を話したことでしょう。

子ども達は、その与えられた環境の中で、精一杯生き抜いてきました。希望や夢を持って・・・

そして2度目の春が巡ってきた今、まぶしいばかりの新築の家の隣に広がる更地・そこに咲く春の草花が、こんなに胸をしめつける物になろうとは・・・

再び迎えた春の中で、もう一度子ども達に希望を語ろうとしたとき、その瞳の奥で、鋭く訴えるもの、悲しく沈んでいるもの、声にならない思いにぶつかるのです。

その瞳は、私達大人に

「この一年間何をしてきたのですか?」「これからどうするのですか?」

と、問いかけているように思うのです。

「困っている人の気持ちになりましょう」「助け合いましょう」

と言ってきた私達大人の姿勢が本物なのかどうか、多くの子ども達は今、無意識に、その心で、その肌で、身体全体で確かめようとしています。

そしてその瞳の奥でサインを送っているように思うのです。

今一番大切なことは、

震災後1年以上たった今も、生活の見通しの立たない、希望のもてない人達の声に耳を傾け、その問題解決のために我が事として行動することではないでしょうか?

「自助努力」「自力更正」の名の下に、時間がたてば「復旧・復興」とスケジュールだけを押しつけるのは、自ら立ち上がろうにも生活の基盤を崩され、その余力のない者にとってまさに「弱者へのいじめ」と受け取られても仕方がないように思うのです。

そして、今一番大切なことは、困っている人たちを支えながら、

「誰もが生きていてよかった」と思える町づくりを、

人々の息遣いが聞こえる温かい町づくりを、

震災の教訓を生かしたやさしい町づくりを

大人たちが、その立場を越えてつくっていく姿を

子ども達に見せることであると、痛切に感じます。

そのことが子ども達に希望を語る事であり、その瞳の問いに答える事にもなり、まさに「人間尊重」の生きた教育の場になると、2度目の春を迎えて改めて思うのです。

・震災後、多くの子供達が神戸を離れ、学級が少なくなりました。

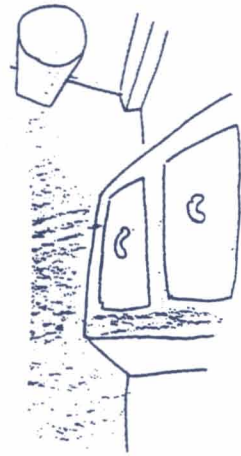
そのため学級を持たない「復興教員」がおかれたのです。

わたしはその「復興教員」として、帰ってこられない子ども達との連絡をとりながら、多くの子ども達やその家族と、授業や生活の中で語り合いました。その中で与えられた課題をみなさんと一緒に考え、少しでも自分の出来ることから行動に起こせたら・・・そして子ども達には、いつも夢を持って進んでほしいとの思いを込めて、この「神戸のなおちゃん」を届けます。子ども達と一緒に読み下さい。

そして実現できる希望を、未来を共に語り合しましょう。

本当の春が神戸を訪れることを願って・・・

1996・春 池見宏子



お話「神戸のなおちゃん」

1996年4月25日 第1刷発行
1996年5月20日 第2刷発行

神戸市立教諭 池見宏子 (著)
デザイナー 池見民子 (イラスト)

自宅 657神戸市灘区楠丘町6-4-12
tel・fax 078-841-0116